

Title	タイ語の連用詞の分析とその理論的背景
Sub Title	Analysis of preverbals in Thai and its theoretical background
Author	峰岸, 真琴(Minegishi, Makoto)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.56 (2025. 3) ,p.357- 380
JaLC DOI	10.14991/005.00000056-0357
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000056-0357

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

タイ語の連用詞の分析とその理論的背景

峰 岸 真 琴

§ 1 はじめに

本稿は現在東南アジア大陸部のタイ語、ラオス語、クメール語の「時の表現」に関する共同研究（科研費JP23K00520）のうち、筆者が担当するタイ語についての中間報告である。研究対象の3言語は、いずれもいわゆる孤立語タイプであり、基本語順がSVOであるという共通性をもつだけでなく、地理的にも隣接し、歴史的、文化的な関係も深い言語である。

§ 1.1 研究の目的

本研究の対象である東南アジア大陸部の3言語だけでなく、広く中国以南の孤立語タイプの諸言語には文法カテゴリーとしてのテンスが存在しない。これらの言語の「時に関わる出来事の叙述」は、西洋近代語のような現在時点を基準点とし、主動詞のテンス・アスペクト表現を中心とする分析法では捉えきれないのではないか。このような問題意識から、我々は従来の主動詞を中心とした分析に留まらず、主題、動詞連続、方向動詞、句末詞などのさまざまな構成要素が、時と出来事の叙述表現にどのように関わるかに着目して研究を行うことにした。

§ 1.2 本稿の目的

本稿の目的は以下の2点について考察を進めることである。

第1点は、現時点での時の表現の分析の概要を示すことである。筆者は近

年この問題について、いくつかの考察を行ってきた。そのうち峰岸（2023a）では、文の分析法として〈複層分析記述法：multilayered analytic method〉を提案し、それに基づいて日本語とタイ語の時の表現の対照を試みた。峰岸（2023b）では、テンスを持たない言語の「時」の表現を考える手段として、〈局面：phase〉の概念を導入した。

これらの考察に加え、西洋の文法観および時間概念についての考察（現在印刷中）を重ねてきたが、その過程で加筆・修正すべき点も生じている。本稿では、最近の考察の内容を踏まえて、現時点でのタイ語の「時の表現」について、その概要を示すことにする。

第2点は、第1点に示す時の表現の構成要素の一つである〈連用詞：preverbals〉の記述・分析についての報告である。峰岸（2023a）は日タイ対照を目的とするため、タイ語部分の〈助動詞層〉が簡略化されている。本稿では〈助動詞層〉とは別に、タイ語を特徴付ける層として〈連用詞層〉を設定する。連用詞の類は動詞に先行する副詞的な語彙であるが、連用詞をどう下位分類するか、また時の表現においてどのように位置づけるかなど、現時点においての分析はまだ不十分である。連用詞のような、文法的対立というよりも語彙的な意義の対立を明らかにすることは困難であるため、本稿では意義分析の現状を報告するにとどめる。なお以下ではタイ語の声調番号（1:中平調、2:低平調、3:下降調、4:高平調、5:上昇調）は本文中の語形にのみ記し、例文中では省略する。

§2 孤立語の時の表現とテンス・アスペクトの枠組み

以下では哲学的時間論および言語類型論の2つの観点から、孤立語の時の表現を分析するためには、従来のテンス・アスペクトの分析の枠組みを見直す必要があることを論じる。

§2.1 テンス・アスペクトの枠組みの見直しの必要性

第1点の哲学的時間論の観点から見ると、テンスの定義が客観的な〈科学的世界像〉を表現するための〈尺度としての時間概念〉を前提としているこ

とを問題にすべきである。この科学的な時間概念は、我々の主観的に経験する時間とは異質のものである。大森（1996:79）によれば、時間は過去と未来のみを含む静態的な座標軸である。一方〈運動〉は現在経験に固有な現象であり、現在を時間に内蔵させようとすると〈時間の流れ〉という奇怪なパラドクスが生まれる。大森は現在経験のみの現象である〈運動〉を、運動と無縁の静態的な時間の中にもちこむことが混乱を生むと主張する。

この大森の主張は、科学的世界像と我々の主観的視点に立ち現れる〈知覚風景の中の出来事〉とは異質であるとする本稿の考えとも一致する。自然言語の表現は、知覚風景において出来事がどう立ち現れるかを叙述するものである。従って我々の認識する出来事は、科学的尺度としての時間とは異なる〈時の表現〉によって叙述されるとも考えられる。峰岸（2023b）の〈局面〉の概念は、この主観的な時間把握を分析するために考案したものである。

第2点の言語類型論の観点から見ると、従来のテンス・アスペクト研究が、いわゆる〈ヨーロッパ近代標準語：Standard Average European〉（以下SAEと略称する）のテンス・アスペクトの枠組みに基づいて、動詞あるいは助動詞の形態論的分析を中心に行われてきたことが問題である。

SAEとタイ語の類型特徴を対比して述べると、両者はともにSVOを基本語順とするが、SAEは主語卓立的であるのに対し、タイ語は主題卓立的であることはよく知られている。ここで重要なのは、SAEは主語卓立的というだけでなく、主語および述語動詞が文の必須要素であり、かつ両者ともに文頭に置かれるという統語特徴を持つことである。これは文頭で人称・数、テンス、法、態の表現が全て特定されることを意味する。言い換えれば、たかだか文頭の主語および定動詞句内の2, 3語を見れば、これらの文に必須の文法要素が特定できるのである。

一方、タイ語では、主語、目的語などの基本的な統語構成要素であっても、指示対象が明らかなものは明示されない。また主題卓立型とはいっても、峰岸・ウィットヤーパーンヤーン（2019）が示すように、主題を表す語句は、日常の会話では先行文脈から引き継がれるため、話題を変えるなり、対比的な表現の場合を除けばめったに現れない。

以上のことから、従来の主動詞を中心としたテンス・アスペクトの枠組みは、SAEの地域特徴と深く関係しているため、述部卓立的とでも呼ぶべき孤立語については「時の表現」の総体を分析の対象とする必要があると考えられる。峰岸（2023a）で時を表す主題名詞や副詞類、さらには文末詞について、複層分析記述法による分析を試みたのは、タイ語でも日本語でも、時と出来事が文のさまざまな構成要素によって多層的に表現されているという仮説に基づくものである。

§ 2.2 複層分析記述法のタイ語への適用

§ 2.2.1 複層分析記述法の概要

峰岸（2023a）では機能主義的な観点に基づいて、〈複層分析記述法〉を提案し、日本語とタイ語の対照分析についてこの方法の有効性を検証した。この分析記述法は、言語の表現面の複層性および時間的不可逆性を基盤とする、複層的、二次元的な記述法であり、西洋音楽の楽譜に例えられる。同論ではタイ語の〈層：layer〉として、〈主題層〉、〈助動詞層〉、〈単独動詞層（V）〉、〈複合動詞層（V1-V2）〉、〈動詞連続層（V1+V2）〉、〈補助動詞層（V1+v）〉、〈終助詞層〉を設定した。各層の概要については峰岸（2023a）を参照されたい。

ただし同論は日タイ対照を目的とするため、各層の名称は日本語文法で一般的なものに従っている。このため同論の〈助動詞層〉は、タイ語の〈助動詞：auxiliary verbs〉に本稿で扱う〈連用詞〉を含めた名称である。また〈補助動詞層〉はタイ語では〈方向動詞層〉（pay「行く」、maa「来る」など）であり、〈終助詞層〉は本稿でいう〈句末詞層〉（Phrase Final Particle）である。これらの各層の構成要素はタイ語における〈時の流れ〉の表現機能を多層的に分担している。タイ語と日本語の対照により、出来事の局面の推移と時の表現との並行性という〈類像性〉が見いだされたことは、人間が共有する〈時の流れ〉に関する認識が、日本語とタイ語の表面的な言語類型の違いを超えた、言語表現のレベルに反映している可能性を示している。

§ 2.2.2 複層分析記述法から見たタイ語の時と出来事の表現

一般に出来事は〈変化：change of state〉の過程を内包する。この変化の過程の認識は、変化の前と変化の後との2つの〈局面〉の差分の認識であると考えられる。峰岸（2023b）で導入したこの〈局面〉の表現を、上に上げたタイ語の各層の構成要素が分担している。主題層の時間詞は、楽譜でいえば通奏低音のように談話全体の時間の流れの基点を表し、次の主題が現れるまで有効性を持つと考えられる。〈動詞連続層（V1+V2）〉では、V1が出来事の発端を表し、V2が出来事の結果を表すことで、時間的あるいは因果的な〈局面〉の推移・展開を表す。本稿で取り上げる〈連用詞層〉は、「未然」、「将然」、「開始」、「進行」など、出来事の始まる前から進行中までを表す。〈方向動詞層〉は出来事の進行・継続を直的に表す。一方、〈句末詞層〉のleew4はある出来事の「完結」から次の〈局面〉への新展開の認識を表現する。

§ 3 連用詞の形態統語上の位置づけと暫定的分類

【連用詞とは】

本稿における〈連用詞〉という品詞名は、坂本（1988:8）がクメール語の品詞名として採用したものである。クメール語では、動詞を前から限定する形式は、〈助動詞〉と〈連用詞〉に分けられる。〈助動詞〉は否定詞munの前に置いて否定できるが、〈連用詞〉はmunの前に置いて否定できない。

孤立語の品詞分類は、原則としてある形式の出現位置に基づいて行われる。しかし内容語と機能語の区別は容易ではなく、一方で名詞や動詞などの語義的意味を持つ形式が、他方では別の出現位置において文法機能を表す形式としても用いられることが多い。これを内容語から機能語への広義の〈文法化〉と解釈することもできるし、ある語形式が複数の文法機能を持つ多義語であると解釈することもできる。

【タイ語の〈連用詞〉】

タイ語については、富田（1997:43）は名詞の修飾や状態の叙述に用いる形容詞・副詞相当の語類を広く〈修飾詞：m. (=modifier)〉とする。〈修飾

詞」という分類は、語形式の出現位置について何も規定しておらず、統語現象について述べる場合、カバーする範囲が広すぎる。そこで本稿では限定対象を前から限定する形式について、クメール語の用語を借用してタイ語の〈連用詞〉と仮称することにする。ただし以下表1の比較項目Cで見るように、クメール語とは異なり、タイ語の連用詞には否定詞may³よりも後ろに現れることができるものもある。これは一部の連用詞がもともと語彙的な動詞などに由来するためである。また§3.7.2で見るように、連用詞には動詞だけでなく、名詞類を限定する用法もあるため、この仮称は語類の分類を再考する際には改めるべきかもしれない。

連用詞のうち、本稿では「出来事が実現に至るまでの時間的な近接」を表す語類を扱う。これらを〈将然の連用詞〉と呼ぶ。連用詞にはこのほかにも yaŋ¹「まだ、依然として」、phəŋ³「近接（直前・直後）：～したばかり」、kamlaŋ¹「進行：～している最中」なども含まれるが、本稿では扱わない。これらを含めた連用詞類のアスペク的な意味には「未然、将然、近接（直前・直後）、進行」相はあるが、「完結・終了」相がないことに注意されたい。これは峰岸（2023b）で論じたように、タイ語では局面展開を意味する句末詞leəw⁴が完結相の表現を分担しているためである。

【「将然」の連用詞】

以下の分析ではVirach Sornlertlamvanich（ウィラット・ソンラートラムワニッチ）武蔵野大学教授にタイ語小説コーパスから抽出していただいた連用詞のリストを対象とした。コーパスから抽出した用例は、先行文脈への依存性が高く、文脈を示さないまま例文を挙げても、意味が理解できない。このため以下では、コーパスの用例に近い意味の短い文を、コンサルタントの太田ワランヤさんによる作文を例として挙げることにする。

以下に〈将然の連用詞〉としての用法を持つ語類について、具体的な例を挙げる。なお例文中の角カッコ（〔 〕）内の斜線「/」で区切られた要素は互いに入れ替え可能なものとする。

- (1) [kuap / theep / cuan / klay / diaw] ca lom-lalaay læw
 もうすぐ 未然 破産する 完結
 もうすぐ破産する。

これら角カッコ内の5つの語形は、一見類義の連用詞と見なせそうだが、それぞれの使い分けや動詞の接語ca?2「未然」との共起関係の詳細については不明な点が多い。(なお、一般に後続する動詞類に接続する接語ca?2は、発話中では軽声化するとともに、声門閉鎖音 [ʔ] を失って、直前の連用詞とも音声・音韻のレベルで結びつく。このため、〈連用詞=接辞〉の結びつきを一つの複合形式と見なすべきかもしれない。) またそれぞれの語形には動詞や接続詞から連用詞へという文法化の過程の有無および文法化の程度の違いがある。

§ 3.1 連用詞の統語環境に関する比較

以下の表1はAからDの比較項目について、5つの〈将然の連用詞〉を比較した結果である。

比較項目A, Bは語形式としての自立性を持つかどうかに関する項目である。項目Aは、ある語形式が動詞、名詞、あるいは副詞などの内容語としての用法を持つかどうかに関するものである。内容語であれば語彙的な自立性が高く、機能語であれば自立性が低い。項目Bは、ある語形式がそれ一語単独で文として用いられるかに関するものである。一語で文として用いられる形式は、統語的な自立性が高いと考えられる。ただしkuap2のように統語的自立性が高い機能語もあるため、本稿ではA, Bを独立した特徴として扱う。

項目C, Dは否定詞may3との共起関係に関する項目である。§3.2以下で見るように、クメール語の場合とは異なり、タイ語の連用詞はmay3の前にも後にも現れることがある。なお表中の「X」は問題となる連用詞の出現位置を表す。例えば「may3 X」は、否定詞may3と当該の連用詞、例えばkuap2との連続である「may3 kuap2」を表す。また「Y (Yes)」は、当該の特徴を持つ場合を、「N (No)」は当該の特徴を持たない場合を表す。ただし両者

の区別が明確でない場合、比較的多くの場合当該の特徴を持つ場合は「Y/n」とし、逆に多くの場合持たない場合は「N/y」として、それぞれ例外的に「n」あるいは「y」が存在することを小文字で記した。従って、例えばkuap2の項目Cで「Y/n: 稀にy」とあるのは、「may3 kuap2」という連続は一般的であるが、稀に使えない場合もあることを示す。

表1：連用詞の比較

比較項目\語形	kuap2	theep3	cuan1	klay3	diaw5
A. 語彙的自立性	N	N	動詞	動詞	接続詞
B. 統語的自立性	Y	N	Y/n	Y	Y
C. may3 X	Y/n: 稀に n	N/y: 稀に y	Y	Y	N
D. X may3	Y	Y	N/y	Y	N

以下ではそれぞれの連用詞がどのような特徴をもつかについて、表1の比較項目A, B「語彙としての自立性」およびC, D「may3との共起関係」を中心に述べる。

§ 3.2 連用詞 kuap2

富田 (1997:194r) にはkuap2について次のような記述がある。

「m. ほとんど、もうすぐ、もう少しで～する所。」

以上からkuap2は基本的に「ある事態が成立する前のぎりぎり未成立の状態にある」ことを示すと考えられる。

§ 3.2.1 語彙としての自立性

項目Aについては、kuap2は連用詞としての用法しかもたないため、動詞などから文法化したのかどうかは不明である。項目Bについては、(2b)のように一見、単独で問答の答えの文を構成することができる。しかし(2b)は先行文脈によってkuap2が限定する動詞teek2「割れる」が含意される場合にしか使えない。従って、項目Aについては動詞や名詞と同等の語彙的自立性を持たないと考えられる。

- (2) a. tɛɛk may?
 割れる 疑問
 割れたか?
- b. kuap (tɛɛk)
 ほとんど 割れる
 あやうく (すんでのところで) 割れそう。[だが割れなかった。]
- c. [OK] kuap, [NG] theɛp, [NG] cuan, [NG] klay, [NG] diaw.

(2) は、物がガラスにぶつかったなどして、あやうくガラスが割れそうになったが、割れなかった場合である。ここでは、tɛɛk2「割れる」という事態について、kuap2は「その事態にほとんど達しているが、ぎりぎり到達しないこと」を示す。(2b) は「割れそうで割れなかった」を意味する。(2c) に示したように、この文脈で適格 (以下、[OK]で示す) となるのはkuap2だけで、他のtheɛp3, cuan2, klay3, diaw5は不適格 (以下、[NG]で示す) である。

(2a) のような、ある動作Vをしたかどうかに関する極性疑問文には、タイ語では肯定の場合、動作Vを繰り返し、否定の場合「may3 V」で答える。しかし (2b) の答えでは動作の生じる程度が答えの焦点となるため、もっとも情報量の大きいkuap2「ほとんど、あやうくVしそうだった」で答えることができる。これはkuap2が自立性の高い副詞であることを示唆していると考えられよう。

以下では (2c) と同様に、ある文脈での連用詞それぞれの適格性について、適格文であることを[OK]で、不適格であることを[NG]で略記することにする。

§ 3.2.2 may3 との共起

比較項目C「may3 X」および項目D「X may3」において、以下ではX=kuap2の場合について述べる。

まずkuap2とmay3 が共起しない場合を挙げる。

- (3) maa kuap ca than

来る もう少し 未然 間に合う

もう少しで間に合うところだった [ぎりぎり間に合わなかった]。

【may3 kuap2 + 動詞の適格性】

「may3 kuap2 + 動詞」の連続はあまり現れないが、次のような表現はある。

- (4) may [kuap day] koo [kuap tok] le?

否定 ぎりぎり 受かる 接続詞 ぎりぎり 落ちる 句末詞

[試験に] [ぎりぎり受から] なければ、[ぎりぎり落ちる] よ。

(4) の場合、角カッコで示した部分「ぎりぎり受かる」という句全体が否定されていて、次の「ぎりぎり落ちる」と対比されている。このため「may3 kuap3 + 動詞」という表現になるが、稀な例である。

【kuap2 may3 + 動詞の適格性】

「kuap2 may3 + 動詞」という連続としては、以下の動詞連続の (5a, b) のような場合がある。kuap2 が限定する句が may3 を含めば、(5a, b) のように肯定的な含意となる。(5c) のように may3 を含まなければ、否定的な含意となる。

- (5) a. kuap ca maa may than

危うく 未然 来る 否定 間に合う

危うく間に合わないところだった [ぎりぎり間に合った]。

- b. phom maa kuap may than

僕 来る 危うく 否定 間に合う

僕は危うく間に合わないところだった [ぎりぎり間に合った]。

- c. phom maa kuap ca than

僕 来る もう少し 未然 間に合う

もう少しで間に合った [ぎりぎり間に合わなかった]。

§ 3.3 連用詞 theep3

富田 (1997:722r) にはtheep3について次のような記述がある。

「m. ほとんど. もう少しで～するところ. すんでのことで～. ～近く.」

富田の挙げる用例から見ると、theep3の限定対象は、「へとへとになるまで、血を吐きそうなほど、頭が変になりそうなほど、ぶったおれそうになるまで、」【動詞の意味する事態の実現の程度】、「ほとんど毎日、すべての人」【数量表現】のようにまとめられる。

§ 3.3.1 語彙としての自立性

富田 (1997:722r) の例を見る限り、theep3は動詞あるいは名詞の限定を表す以外に語彙的な意味はなさそうである。theep3はまた単独で一語文を作ることではない。このことから、theep3の語彙としての自立性は低いと考えられよう。

§ 3.3.2 may3 との共起

【may3 theep3 の適格性】

コンサルタントの内省によれば、may3 theep3は翻訳などに見られる稀な表現だが、不適格な表現に感じられる。正しい表現とは思われないが意味は分かるので、将来一般化するかもしれないとのことである。

(6) a. theep=ca aw l=chiiwit may root

ほとんど 命をかける 否定 逃れる

あやうく生き残るのができないところだった。

b. ?may theep=ca aw l=chiiwit root 【稀に見られる表現】

否定 ほとんど 命をかける 逃れる

次の (7) のような場合、may3は角カッコ内の句全体を否定しているの

であり、may3 theep3 という連続をなしているわけではない。

- (7) may [theep thuk khon thii choop ca kin natto]
否定 ほとんど すべての 人 関係詞 好き 未然 食べる 納豆
[ほとんどすべての人が納豆を食べるのが好きだ] (というわけ) ではない。

【theep3 may3 + 動詞の適格性】

「theep3 may3 + 動詞」の連続としては、次のような否定の程度を表す例がある。

- (8) thəə khon khooŋ pay mot theep may mii
彼女 運ぶ 荷物 行く 全て ほとんど 否定 ある
aray lua yuu leew
不定 残る いる 完結
彼女は荷物を全て運んで行って、ほとんど何も残っていない。

(8) ではtheep3がmay3 mii「ない」の程度を「ほとんどない」と限定している。

§ 3.4 連用詞 cuan1

富田 (1997:171r) にはcuan1について次のような記述がある。

「n. 領主の館、知事公邸、n. 布の一種、m. ほとんど、近く。」

以上のように、cuan1には名詞として「知事公邸」の意味を持つが、この名詞から連用詞への文法化の過程を考えることは困難であるため、この名詞は同音異義語と見なす。

§ 3.4.1 語彙としての自立性

cuan1は動詞「(危険などが身に) 迫る、切迫する、危ない」という意味を持つ。動詞としての用法であれば、一語単独で文として用いられる。この

場合、cuan1がtua1「身体」を補語にとり、cuan1 tua1「身に迫る、事態が切迫する」という言い方もある。

また否定詞may3を前置したmay3 cuan1「切迫・困窮していない」状態を表すことから、動詞として用いられることが分かる。

以下の(9)の場合、主動詞が省略され、cuan1と完結の句末詞(女性が用いる)が用いられている。

- (9) a. ɲaan set ruu yaŋ?
仕事 終わる あるいは まだ
仕事は終わりそう?
- b. cuan (set) lɛw kha?
すぐ 終わる 完結 句末詞(女性)
「もうすぐ(終わる)よ。」

主動詞よりも程度を表すcuan1の方が情報量が大きいのは(2b)の場合と同様である。

§ 3.4.2 may3 との共起

【may3 cuan1 の適格性】

may3 cuan1という形式の連続は、日常会話では一般的ではない。ただしcuan1は本来動詞であるため、否定詞may3を前置して否定することができる。同様に、「否定詞+連用詞」として動詞に先立つ形式「may3 cuan1 + 動詞」として、例えばWeb上には次の(10)のような例がある。

- (10) yaŋ may cuan=ca taay kɔɔ din pay kɔɔn lɛw
まだ 否定 すぐ 死ぬ 接続 のたうつ 方向 前に 完結
まだ死ぬ寸前ではないのに、もう既に七転八倒している。

参照元：https://old.luangta.com/thamma/thamma_talk_text.php?ID=1080&CatID=2

【cuan1 may3 の適格性】

「cuan1 may3 + 動詞」は日常会話ではあまり用いられず、「kuap2 may3 + 動詞」を用いる。ただしインターネット上では次の(11a)のように、「cuan1 may3 set2」(set2は「終わる」)の例が使われている。

- (11) a. thaa man cuan may set ciŋ-ciŋ, [...]
もし 代名詞(それ) すぐ 否定 終わる 本当に…
もしそれ[その仕事]が本当にぎりぎり終わりそうにないなら
[あきらめちゃえ]
- b. thaa (hen waa) man ca may set ciŋ-ciŋ, [...]
もし 見たところ それ 未然 否定 終わる 本当に…
もし、それが本当に終わりそうにないならば [...]

ただし上記の場合、(11a)よりも(11b)の言い方の方が一般的である。

§ 3.5 連用詞 klay3

富田(1997: 2051)にはklay3について次のような記述がある。

「m. 近い。」

本稿でいう連用詞としての使い方は、見出し語ではなく、例文として「もうすぐ(お正月だ)」、「もう少しで命を落とすところだった」が挙げられている。

§ 3.5.1 語彙としての自立性

klay3は空間的近接性を表す状態動詞(形容詞)「近い」である。連用詞の用法は、空間から時間的近接性を表す用法へと転用されたものと考えられる。

§ 3.5.2 may3 との共起

【may3 klay3 の適格性】

klay3を連用詞として使う場合には、may3 klay3 のような、否定詞を前置する言い方として、次の(12)のような例がある。

- (12) may klay taay koo may khət
否定 近い 死ぬ 接続詞 否定 懲りる
死に直面しなければ懲りない。

【klay3 may3 の適格性】

一般に、klay3を連用詞として用いる場合は、次の(13)のような例がある。

- (13) phom klay may way læw
僕 近い 否定 耐える 完結
僕はもうそろそろ耐えられない。

一般的に言って、klay3の連用詞としての用法は、§ 3.7で連用詞の限定の対象について具体的に検討するように、他の連用詞に比べて使用範囲が狭く限られているようである。

§ 3.6 連用詞 diaw5

富田(1997:535r)には、diaw5について次のような記述がある。

「m. しばらく、間もなく、やがて、もうすぐ。」

これに加えてdiaw5は連用詞としての用法も持つと考えるべきである。

§ 3.6.1 語彙としての自立性

【接続詞・副詞としてのdiaw5の用法】

まずdiaw5の接続詞あるいは副詞としての用法について述べておきたい。

富田(1997:535r)の挙げる(14)のような例では、diaw5は一見して動詞

の直前に現れているため、他の連用詞と同じ出現位置に現れるように見える。

(14) diaw koo maa 【富田（1997:535）例文】

もうすぐ 接続 来る

もうすぐ来ます

しかし次の（15）のように、動詞が主語を伴う例を見ると、diaw5の出現位置は主語よりも前である点で、他の連用詞とは異なっている。

(15) a. diaw man koo taay

もうすぐ そいつ 接続詞 死ぬ

もうすぐそいつは死ぬ（でしょう）。

b. *man diaw koo taay

c. man [kuap / theep / cuan / klay] ca taay yuu leew

そいつ もうすぐ 未然 死ぬ いる 完結

そいつはもうすぐ死ぬ（でしょうね）。

（15a）では文頭のdiaw5の後に主語の代名詞man1「そいつ」が置かれ、動詞taay「死ぬ」が続いている。diaw5とman1を入れ替え、diaw5を動詞直前に置いた（15b）は非文である。（15c）では主語の代名詞名詞man1の後に連用詞kuap2の類いが置かれる。このことから、diaw5の統語的な位置は接続詞あるいは副詞のものであることがわかる。

表1の項目Aにおいては、diaw5は単独で文頭におかれることから、語彙的自立性を持つ「接続詞」と認定できる。また項目Bの統語的自立性の面でも、次の（16a）のように、diaw5一語で「ちょっと待って」のように呼び掛けて、聞き手が何かしようとするのを呼び止め、思いとどまらせることは日常の会話ではしばしばある。（16b）のように動詞を後ろから修飾することもできる。この場合、diaw5は副詞と見ることができる。

- (16) a. diaw, (diaw)
 もうすぐ (もうすぐ)
 もうすこし、しばし (待って!)
- b. khooy diaw
 待つ しばし
 ちょっと待って!

以上のように、diaw5は一見連用詞に含められそうだが、(16a, b) や次の (17a, b) のような接続詞あるいは副詞としての用法を持つ点で、他の連用詞 (動詞起源のものも含め) とは性格が異なる。

- (17) a. diaw (chan) ca pay-haa phrun-nii na?
 では 私 未然 訪問する 明日 句末詞
 それじゃ(こうしよう) 私は明日会いに行くね
- b. diaw mæe may hay saləy
 では 私 (母) 否定 あげる 句末詞
 [そんなことをしたら] お母さんは [お菓子を] あげないよ。

(17a) は接続詞あるいは副詞の用例で、先行文脈の状況を受けての「では」に相当する用例である。(17b) は、例えばいたずらをしている子に、「そんな悪いことをするのならば、お菓子をあげないからね。」とたしなめるような場合の表現である。この「先の状況を見て、その結果、すなわち」のような表現から、一見して連用詞のような用法が生じた可能性が考えられる。

§ 3.6.2 may3 との共起

【may3 diaw5 の適格性】

may3 diaw5 という連続は存在しない。

【diaw5 may3 の適格性】

diaw5 may3 という連続もまた存在しない。ただし会話では次の (18) のような例はある。

(18) diaw (thəə) may than na?

でないと 君 否定 間に合う 句末詞

「急がないと、君は」間に合わなくなっちゃうよ。

(18) は会話で聞き手に対して直接話しかける場合には thəə1 「君」は省略されるため、diaw5 may3 という連続に見えるが、この diaw5 may3 は連続した形式とは認められない。

§ 3.7 連用詞の限定対象に関する比較

どのような動詞句あるいは名詞類を限定するかによって、使える連用詞が異なるが、使い分けの詳細は不明である。以下は指示対象によって、表1の kuap2, thep3, cuan1, klay3 のうち、どの連用詞が使えるかを例示したものである。

§ 3.7.1 動詞句を限定する場合

【単独の述語動詞 V を限定する場合】

(19) の thep3 は動詞 tək2 「壊れる」の実現の程度を限定している。

(19) baan thep tək

家族 ほとんど 壊れる

「大事件が起きて」家族がばらばらに壊れそうだった。

(19) の限定詞の使い分けは以下の通りである。

【OK】 kuap2 よりも thep3 が一般的, 【OK】 thep3, 【OK?】 cuan1 はあまり良くない, 【NG】 klay3.

【動詞連続 V1 + V2 の V1 を限定する例】

連用詞は動詞連続V1 + V2のV1を限定することもできる。次の(20)でV1 : maa1「来る」とV2 : than1「間に合う」は、動詞連続V1+V2「来て間に合う」である。

- (20) a. phom kuap maa may than
僕 あやうく 来る 否定 間に合う
[渋滞で] 僕はあやうく間に合わないところだった [ぎりぎり間に合った]。
- b. phom theep maa may than
僕 あやうく 来る 否定 間に合う
僕はあやうくぎりぎりで間に合わないところだった。
- c. phom cuan=ca maa may than yuu leew tee, [...]
僕 あやうく 来る 否定 間に合う いる 完結 しかし
僕は遅れそうになったけど、[...]

[OK] kuap2, [OK] theep3, [NG?] cuan1, [NG] klay3.

なお(20a)よりも(20b)のほうがぎりぎりまで切迫した感じがする表現である。(20a, b)の文脈では、他の形式cuan1やklay3は使えない。ただし(20c)のように、cuan1でなく、cuan1=ca (ca?は未然の接語)を伴い、さらに後ろに「yuu leew tee, [...]」(ここでyuu2は「実際に、確かにそうになっている」を意味する方向動詞、次にtee2「逆接」の接続詞が続く)のように、適切な文脈を与えると適格文[OK]となるため、cuan1が必ずしもV1位置におけないわけではない。これは特定文脈における適格性の判断を比較する、という本稿の分析方法の限界を示すものかもしれない。さらに検討を進める必要がある。

【動詞連続 V1 + V2 の V2 を限定する例】

一般に助動詞は文中の最初の動詞を限定するが、連用詞は動詞連続(V1

+V2) のV2の実現の程度を限定することもできる。この点で連用詞と助動詞とは区別できる。

- (21) cam kuap may day
覚える ほとんど 否定 可能
ほとんど覚えていない。

【OK】kuap2, 【OK】theɛp3, 【OK?】cuan1 は稀に使う人がいるかもしれない。

【NG】klay3.

- (22) a. phom maa kuap may than
僕 来る ほとんど 否定 間に合う
僕はぎりぎり間に合わないところだった。

- b. phom maa theɛp may than
僕 来る ほとんど 否定 間に合う

【OK】kuap2, 【OK】theɛp3, 【OK】cuan1 はあまり使われない。【OK??】

klay3 は意味は通じるが、使う人はあまりいそうもない。

なお (20a, b) と同様、(22a) よりも (22b) のほうがぎりぎり切迫した感じがする表現である。

【V1 の句に接続する動詞句 V2 を限定する例】

V1 に別の動詞句V2が後続する点では動詞連続「V1 + V2」と同様だが、(23) のように、両者の間に接続詞con1 「そして」があってもtheɛp (ca) V2 は可能である。

- (23) khaw tok=cay con theɛp-ca chok-taay
彼 驚く 接続詞 ほとんど ショック死する
彼は死ぬほど驚いた。

【OK】kuap2, 【OK】theɛp3 が一般的, 【OK ?】cuan1 は稀。年配者なら使うかもしれない。【NG】klay3.

§ 3.7.2 名詞類を限定する場合

以下に挙げるように、連用詞には動詞だけでなく、名詞類を限定して数量や時間の進行の程度を示す用法がある。このことは、動詞（用言）を限定するという意味での〈連用詞〉という呼称が必ずしも適切でないことを示している。

【数量：全体に対する数量の部分限定する例】

(24) fon tok theep thuk=wan 【富田（1997:722r）例文】

雨 降る ほとんど 毎日

ほとんど毎日雨が降る

【OK】 kuap2, 【OK】 theep3 【富田】, 【NG】 cuan1, 【NG】 klay3.

(25) ruu kan theep thuk=khon 【富田（1997:722r）例文】

知る 互いに ほとんど 全員

ほとんどすべての人が知っている。

【OK】 kuap2, 【OK】 theep3 【富田】, 【NG】 cuan1, 【NG】 klay3.

(24), (25) のように、全体に対して占める割合、程度を限定する場合には、cuan1, klay3は使えない。一方次の(26)のように、時間の進行を限定する場合はcuan1, klay3が使える。この場合、時間進行を示す方向動詞maa1「来る」、「完結」を表す句末詞leeuw4が用いられることに注意すべきである。このことは、「丸まる一年」という全体に対する「ほぼ一年」という割合、程度を表すのではなく、「もうすぐ一年近くなる」という進行の程度を表すためかもしれない。

(26) chan may-day pay haa thəə maa kuap pii leeuw.

私 否定 訪問する 彼女 方向 ほとんど (一) 年 完結

私は彼女をほとんど一年近く訪ねていない。

【OK】 kuapが一般的. 【OK?】 theepは使う人がいるかもしれないが、一般

的ではない。【OK】 cuan1, 【OK】 klay3 も可能。

(26) に近い例として、以下の (27), (28) のような「時間の進行の程度」を限定する場合が挙げられる。ただし (27) には「完結」を示す句末詞 læw4 が用いられているが、(28) にはない。

【時間の進行の程度を限定する例】

(27) kuap tii=nuŋ læw

ほとんど 午前一時 完結

「今何時？」と聞かれて] もうそろそろ午前の1時になるよ。

【OK】 kuap2 が一般的, 【NG】 theep3, 【OK】 cuan1, 【OK】 klay3.

時間の進行の程度の限定では theep3 は使わず、kuap2 が一般的に使われるが、cuan1 も使われる。klay3 は使えないわけではないが、あまり使われない。これは cuan1 が動詞としての意味「迫る」から文法化したこと、および klay3 が「空間的に近い」から文法化したことによると考えられそうである。

なお同じ時間の進行の程度の場合であっても、(28) には、(26), (27) のような明示的に時間の進行を表す maa1 「来る」や læw4 「完結」はないが、「向こうに着く頃には」という先行する条件の結果として、時間の経過が含意されているとも考えられる。

(28) kwaa=ca thuŋ noon kɔɔ kuap thiaŋ

前に 着く 向こう 接続 ほとんど 正午

向こうに着く頃にはほぼ正午になる。

【OK】 kuap2, 【OK?】 theep3 「ぎりぎり」を強調する人が使うかもしれない、
【OK】 cuan1, 【OK】 klay3.

(28) の場合、kuap2 が一般的で、theep3 はまったく使えないわけではないが、使い分けの基準は今のところ不明である。

§4 おわりに

本稿では、近年筆者が考察を重ねてきたタイ語の〈時と出来事の表現〉の研究の現状について、〈連用詞〉のうち〈将然の連用詞〉*kuap2*, *theep3*, *cuan1*, *klay3*, *diaw5* (いずれも「もうすぐ」に相当する類義語)を取り上げて分析した結果を報告した。峰岸(2023a)で提案した〈複層分析記述法〉と、峰岸(2023b)で導入した〈局面〉の概念は、ともにテンスを持たない言語の「時」の表現を考えるための道具立てである。峰岸(2023a)で〈助動詞層〉と呼んだ層は、本稿で仮称する〈連用詞層〉を含んでいる。本稿では語形式の自立性および否定詞*may3*との共起関係の観点から連用詞を分析した結果、次の2点が明らかになった。

第1点は連用詞の出現位置についてである。クメール語の連用詞とは異なり、タイ語の連用詞には否定詞の前だけでなく、後に現れるものもある。また動詞連続(V1+V2)において、連用詞がV2を限定することができる。以上から、タイ語では〈助動詞層〉とは別に〈連用詞層〉を設定すべきであると考えられる。

第2点は連用詞の限定する対象についてである。§3.7.2で見たように、連用詞には動詞だけでなく、名詞類を限定して数量や時間の進行の程度を示す用法がある。ここで名詞類を限定できることから、連用詞と峰岸(2019)で考察した〈とりたて詞〉との異同が問題になる。〈とりたて詞〉という語類の名称はタイ語にはないが、同論では日本語との対照のため、名詞類の数量を限定する語類(クメール語の〈連名詞〉に相当する)をこう呼んでいる。連用詞には本稿で扱った時の流れの中での「局面の開始時に注目する語類」のほかにも、時間的な「近接、進行」を表すものもある。一方〈とりたて詞〉は時の流れとは無関係に、数量の多少に注目する表現であるという機能上の違いがある。

将来タイ語の語類の再分類を試みる際には、動詞あるいは名詞を前から限定する〈限定詞〉を認め、主として動詞を限定する語類(連用詞)と、名詞を限定する語類(とりたて詞)とに下位分類することも考えられよう。

【謝辞】 本研究はJSPS科研費JP23K00520の助成を受けたものである。

本稿の分析に使用したタイ語のコーパスデータは、武蔵野大学Virach Sornlertlamvanich（ウィラット・ソンラートラムワニッチ）博士から提供を受けたものの一部である。またタイ語のコンサルタントは、太田ワランヤ氏である。ここに記して感謝の意を表したい。

参考文献

- 峰岸真琴、ウィッタヤーパンヤーノン・スニサー（2019）「タイ語の主題とその談話での現れ方について」、『言語の類型特徴対照研究会論集』, 第2号. pp.111-135. 日中言語文化研究社.
- 峰岸真琴（2019）「タイ語のとりたて表現」野田尚史（編）『日本語と世界の言語のとりたて表現』 pp.129-144, 東京：くろしお出版.
- 峰岸真琴（2023a）「タイ語と日本語の時の表現の対照」『日本語・日本学研究』 13: 175-197. 東京外国語大学国際日本研究センター .
- 峰岸真琴（2023b）「タイ語の時と出来事の表現」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 54: 347-362.
- 大森莊蔵（1996）『時は流れず』 東京：青土社.
- 坂本恭章（1988）『カンボジア語辞典』 東京：大学書林.
- 富田竹二郎（1997）『タイ日大辞典』 東京：めこん.